

令和2年度(7月~9月) 日程表		Schedule																														
2020 7	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31	
	〈展示室1〉普通展示(浮世絵): うきよえどうぶつ展(7/26)																											※1				
	〈展示室2〉普通展示(東洋陶磁): 白と黒 モノクロームのやきもの(7/30)																															
	〈展示室3~6〉特別展示: 大集合! やきものどうぶつ展(7/4~8/30)																															
	〈展示室7〉普通展示(陶芸): 表現を切り拓いて 十三代三輪休雪(三輪和彦)の陶造形(7/30)																															
	〈展示室8〉普通展示(工芸): 表現をみつめて(7/30)																															
	〈特選鑑賞室〉歌川広重 名所江戸百景 市中繁栄七夕祭(7/4~7/31)																															
	〈茶室〉沖 潤子「anthology」(アンソロジー)(7/28)																															
※1 普通展示(浮世絵): 山口県と浮世絵(7/28~8/30)																																
2020 8	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31	
	〈展示室1〉普通展示(浮世絵): 山口県と浮世絵(8/30)																															
	〈展示室2〉普通展示(東洋陶磁): 白と黒 モノクロームのやきもの(8/30)																															
	〈展示室3~6〉特別展示: 大集合! やきものどうぶつ展(7/4~8/30)																															
	〈展示室7〉普通展示(陶芸): 表現を切り拓いて 十三代三輪休雪(三輪和彦)の陶造形(8/30)																															
	〈展示室8〉普通展示(工芸): 表現をみつめて(8/30)																															
	〈特選鑑賞室〉東洲斎写楽 三代目市川高麗蔵の志賀大七(8/1~8/30)																															
	〈茶室〉沖 潤子「anthology」(アンソロジー)(8/28)																															
★ イベント																																
2020 9	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30		
	〈展示室1〉普通展示(浮世絵): 月岡芳年 風俗三十二相(9/12~10/11)																															
	〈展示室2〉普通展示(東洋陶磁): 茶碗の造形美(9/12~12/20)																															
	〈展示室3~6〉特別展示: 三輪龍氣生展 一行け、熱き陶の想いよ。(9/12~12/20)																															
	〈展示室7〉特別展示: 三輪龍氣生展 一龍人伝説(9/12~3/7)																															
	〈展示室8〉特別展示: 三輪龍氣生展 一行け、熱き陶の想いよ。(9/12~12/20)																															
	〈特選鑑賞室〉歌川広重 木曾海道六十九次之内 宮ノ越(9/12~1/30)																															
	〈茶室〉沖 潤子「anthology」(アンソロジー)(9/28)																															
● 浮世絵 ● GT ● AT ● 陶芸 ● GT																																

★ イベント

「大集合! やきものどうぶつ展」関連イベント

① ワークショップ「秋焼で動物をつくらう」【要観覧券】
 講師 ● 止原 理美氏 (陶芸家)
 日時 ● 8月 8日 [土] A 10:00~11:30、B 13:00~14:30
 会場 ● 陶芸館多目的室
 定員 ● 各回8名(申込先着順。小学生以下は保護者の同伴が必要)
 参加費 ● 1,000円

② ワークショップ「やきものどうぶつ箸置き作り」【要観覧券】
 講師 ● 止原 理美氏 (陶芸家)
 日時 ● 8月 15日 [土] A 10:00~11:00、B 13:00~14:00
 会場 ● 陶芸館多目的室
 定員 ● 各回8名(申込先着順。小学生以下は保護者の同伴が必要)
 参加費 ● 1,000円(制作する箸置きは一人5個までとなります)

③ ワークショップ「羊毛フェルトでどうぶつ作り」【要観覧券】
 講師 ● 郭 伝瀬 (かく でんこう) 氏 (羊毛造形作家)
 日時 ● 8月 22日 [土] 9:30~12:00
 会場 ● 陶芸館多目的室
 定員 ● 10名(申込先着順。小学生以下は保護者の同伴が必要)
 参加費 ● 2,500円

※①~③のワークショップは全て事前申込制となります。お電話(0838-24-2400)にて、参加者全員の氏名・年齢・代表者の住所と電話番号(日中の連絡先)、参加回(AまたはB)をお知らせください。

※①と②のワークショップでの完成作品は、当館まで直接取りに来ていただくか、または配送(料金着払い)でのお渡しとなります。受取開始日時についてはイベント当日のご案内します。

▲ アーティスト・トーク (三輪龍氣生氏による特別展示作品解説)
 「三輪龍氣生展 一行け、熱き陶の想いよ。」
 日時 ● 9月 19日 [土] 14:00~15:30

● ギャラリー・ツアー (担当学芸員による特別展示作品解説)
 「三輪龍氣生展 一行け、熱き陶の想いよ。」
 日時 ● 9月 13日 [日]、9月 27日 [日] 11:00~12:00

■ ギャラリー・トーク (担当学芸員による普通展示作品解説)
 いずれも11:00~(30分程度)
 7月 11日 [土] うきよえどうぶつ展 (中止)
 7月 25日 [土] 白と黒モノクロームのやきもの (中止)
 8月 8日 [土] 山口県と浮世絵 (中止)
 8月 22日 [土] 表現を切り拓いて 十三代三輪休雪(三輪和彦)の陶造形 (中止)
 9月 12日 [土] 月岡芳年 風俗三十二相
 9月 26日 [土] 三輪龍氣生展 一龍人伝説

※イベント詳細については美術館ホームページをご覧ください。
 ※ギャラリー・ツアー、ギャラリー・トークへのご参加には観覧券が必要です。

開催中止のご案内 「第8回現代ガラス展 特別展」
 8月 25日 [火] ~ 8月 30日 [日]

※新型コロナウイルス感染拡大防止のため、臨時の休館やイベントを中止・変更する場合があります。詳しくは当館ホームページをご覧ください。
 お問い合わせ TEL: 0838-24-2400 URL: https://www.hum.pref.yamaguchi.lg.jp/

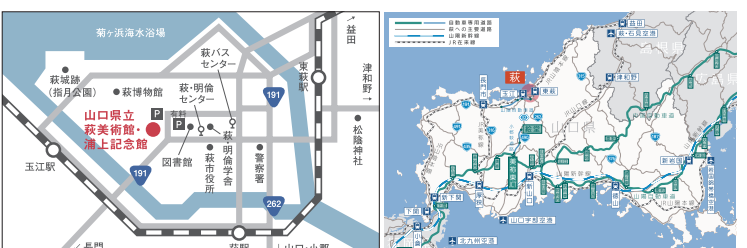
■ 交通アクセス

[新山口駅から]
 ● 直行バス「スーパースター」(約60分)で萩・明倫センター下車。徒歩約5分
 ● 防長バス(約95分)で萩バスセンター下車。徒歩約12分

[山口宇部空港から] [萩・石見空港から]
 ● 萩近鉄タクシー(乗合タクシー)約70~80分(利用前日までに要予約)

[JR山陰本線]
 ● JR萩駅から萩循環まわーるバス(西回り)約30分
 ● JR東萩駅から萩循環まわーるバス(東回り)約30分
 ● JR玉江駅から徒歩約20分

[自動車]
 ● 「中国自動車道」美祿東JCT経由、「小郡道路」絵堂ICから約20分
 ● 「山陰自動車道」三見ICから約10分、国道191号沿い



HAGI 萩

SUMMER ISSUE 2020

96

題字は吉田松陰筆跡



三輪休雪(十代休雪)「萩獅子置物」1960年代 高31.5cm 個人蔵

萩焼における 置物造形の系譜

—「大集合! やきものどうぶつ展」に寄せて

萩焼というと、近世の江戸時代前期から優れた侘数寄の茶陶を生み出した窯業地というイメージから、茶碗を中心とした茶の湯の器を思い浮かべる方が多いと思います。しかし、今回の特別展示「大集合! やきものどうぶつ展」では、そうした侘数寄の茶陶ではない萩焼のやきものを展示しています。それらは動物をモチーフにしたやきものの立体造形で、萩焼の置物作品です。

こうした動物などの具象的な姿をかたどった彫像の置物や器物は、細工物とも呼ばれ、江戸時代前期の17世紀後半に流行しています¹。その頃制作された動物をかたどった立体造形作品としてよく知られているのは、京都の御室窯の野々村仁清が制作した香炉や香合で、「色絵雄香炉」(石川県立美術館蔵、雄雌一対で、雄は国宝)はその代表的な作品です²。また、九州の肥前窯でも、いわゆる柿右衛門様式の色絵磁器による動物の置物が作られており、多くがヨーロッパ向けに輸出

されています³。またそれ以前にも、桃山時代から江戸時代初期に制作された京都の樂家による樂焼の獅子瓦、獅子香炉が、動物の立体造形作品として知られています⁴。

続く18世紀以降も、こうした鑑賞性の高い精巧な細工物や置物作品が京焼と備前焼を中心に制作され、19世紀になるとさらに地方に広がり、全国の窯でも作られるようになります。とりわけ京焼においては、



図1
六代三輪喜楽
《萩玉取獅子置物》
江戸時代後期
高34.3cm
当館 寄託

江戸時代後期の19世紀前半に名工と呼ばれる陶工たちが多く輩出し、なかでも仁阿弥道八(天明3〈1783〉～安政2〈1855〉)は、動物をかたどった置物、手焙、炉蓋などのユニークで自由な造形表現の彫塑的作品が知られています⁵。

萩焼においても、こうした置物作品の遺品は少なく、今回の展覧会では、萩焼の置物制作が最盛期であった江戸時代後期の六代三輪喜楽と七代三輪休雪の制作と考えられる狸や獅子といった表現豊かな動物の置物作品を展示しています(図1、2、3)。

萩焼の伝統窯三輪家では、初代三輪休雪(寛永7〈1630〉～宝永2〈1705〉)が寛文3(1663)年萩藩に御雇細工人として召し抱えられ、元禄13(1700)年には藩命により京都の樂家に修業にいき樂焼を習得しています。また四代休雪(宝永2〈1705〉～宝暦14〈1764〉)も



図3
七代三輪休雪
《萩立獅子置物》
江戸時代後期
高36.5cm
当館蔵



図4
三輪壽雪(十一代休雪)
《萩玉取獅子置物》
昭和10(1935)年 高33.0cm
当館蔵

延享元(1744)年藩命により樂家に樂焼修業に出向いており、これにより萩での置物作りが、樂家伝承の手捏ね(手捻り)や紐作りの造形技術を習得した三輪家によって始められたと考えられています⁶。江戸時代後期の六代三輪喜楽と七代三輪休雪は、そうした萩焼の置物作りの名工として知られ、獅子などの動物や仙人、布袋、武将といった人物など多くの置物の優品を残しています⁷。

江戸時代後期の萩焼では、こうした置物作品に萩焼の茶碗、水指などの茶陶で使われている大道具を使用せず、半磁器質の小畑磁器土を使用し、灰釉系の釉薬を掛け青磁のような風合いを出しており、茶陶とは区別して制作されたことがうかがえます。

近代以降にも三輪家では置物制作は続けられており、九代三輪雪堂は明治末から大正にかけて皇室向けの献上品の置物を制作しています。また十代を継いだ三輪休和(十代休雪 明治28〈1895〉～昭和56〈1981〉)は、若いときから父の九代雪堂の献上品の代作をつとめたといわれ、晩年まで置物作りを好んで続けています。とくに休和は、戦後、重要無形文化財「萩焼」の保持者(人間国宝)に認定され、弟の三輪壽雪(十一代休雪 明治43〈1910〉～平成24〈2012〉)とともに独自の白釉「休雪白」を開発するなど近代的な萩焼のスタイルを確立させ、置物制作においても、型にはまらない独創的な造形をつくり出しています(表紙)。兄の休和に続いて重要無形文化財「萩焼」の保持者に認定された壽雪も、置物制作には卓越した技倆を発揮しており、今展の出品作《萩玉取獅子置物》(図4)からは、三輪窯家伝の妙技を受け継いだ非凡な造形力が感じられます。

こうした代々の置物制作において培われた三輪家伝

註
1 矢部良明「細工物」『角川日本陶磁大辞典』角川書店、2002年
2 荒川正明「近世における型物造形-「造り物」から室礼のうつわへ」『出光美術館研究紀要 第9号』出光美術館、2003年
3 『古伊万里の道』佐賀県立九州陶磁文化館、2000年
4 赤沼多佳「楽(長次郎と楽代々) (日本の美術 No.399)」至文堂、1999年
5 『天才陶工 仁阿弥道八』サントリー美術館、2014年
6 榎本徹「萩焼スタイルの成立と展開」『萩焼400年展-伝統と革新』朝日新聞社、2001年
7 萩焼の置物作品は、このほかに井上武兵衛の銘がある作品や坂銘のある作品、長門の窯元に伝えた作品が知られ、三輪家だけでなく多くの窯で作られていたと考えられています。前掲註6榎本徹「萩焼スタイルの成立と展開」『萩焼400年展-伝統と革新』(朝日新聞社、2001年)ほか参照。

統の造形手法は、父壽雪から家督を継いだ三輪龍氣生(十二代休雪 昭和15〈1940〉年生まれ)の彫刻的具象表現によるオブジェ陶にも受け継がれています(図5)。「愛(エロス)」と「死(タナトス)」をテーマに常に自己の内的世界をかたちにしてきた龍氣生は、昨令和となって弟の三輪和彦(十三代休雪 昭和26〈1951〉年生まれ)に家督を譲りましたが、今年傘寿(80歳)を迎えようとしてもなお自己の思想をさらに深化させ、新たな造形を生み出そうとしています。

萩焼における置物造形の系譜について、動物をモチーフにした立体造形作品を中心に、近世の細工物の大まかな歴史的な流れから萩焼における置物制作の伝統を受け継いできた三輪家代々の置物作品やオブジェ作品を主にみてきました。今回の展覧会では、これ以外にも古代中国の動物俑などの陶製の立体造形作品や、動物文様を施した陶磁器など、東アジアの古陶磁から近現代の陶芸まで、多彩なやきものの動物造形作品を選び紹介しています。やきものというと実用の器物が一般的ですが、今展では動物をテーマとすることで、やきものが持つ優れた造形技術や土の造形力に注目し、そうした動物造形表現を通して、さらに人と動物との関係が垣間見えればと考えています。

(後藤 修/当館学芸課長)



図5
三輪龍氣生(十二代休雪)
《愛の季》
平成16(2004)～平成22(2010)年 高47.0cm
当館蔵

図2
六代三輪喜楽《萩飛獅子置物》
江戸時代後期
高32.2cm
当館蔵

東アジアの古陶磁から近現代の陶芸まで



tys開局
50周年
記念

大集合! やきもの どうぶつ展

2020年 7月4日(土) → 8月30日(日)

休館日 / 7月13日(月)、20日(月)、27日(月)、8月11日(火)、17日(月)、24日(月)
開館時間 / 9:00~17:00(入場は16:30まで)
観覧料 / 一般1,000(800)円、70歳以上・学生800(600)円

※()は前売りおよび20名以上の団体料金。 ※18歳以下の方と高等学校・中等教育学校・特別支援学校の生徒は無料。
※身体障害者手帳、療育手帳、戦傷病者手帳、精神障害者保健福祉手帳の提示者とその介護者(1名)は無料。
※前売券は、ローソンチケット(Lコード:61386)、セブンチケットにてお求めになれます。

主催 / やきものどうぶつ展実行委員会(山口県立萩美術館・浦上記念館、毎日新聞社、tysテレビ山口)
後援 / 山口県教育委員会、萩市、萩市教育委員会 特別協力 / エフエム山口

はるか昔から私たち人間の生活は、動物たちと様々に関わりながら多様で豊かな文化を生み出してきました。動物たちの姿は、私たちに豊穡なるイメージをもたらし、自然の持つ不思議な力に対する思いや、長寿や富貴といった人々の願いや祈りに伴う吉祥な意味とも結びつき、これまで様々な動物造形が創り出されてきました。

本展覧会では、そうした多様な動物

造形作品の中でも、陶製の動物立体造形作品や動物文様を表した陶磁器など、やきものに表現された動物の姿・かたちを一堂に展示し、人々がこれまで動物たちをどのように見つめ、表現しようとしてきたのかを探ろうとするものです。身近なかわいい動物や想像上のいきものなど、東アジアの古陶磁から近現代の陶芸作品まで、多彩なやきもの動物造形表現をお楽しみください。

▶イベントのご案内：裏表紙のイベント欄をご覧ください。

※新型コロナウイルス感染拡大防止のため、臨時休館やイベントを中止・変更する場合がございます。詳しくは当館ホームページをご覧ください。

- 1.《染付兎形皿》日本・江戸時代(17世紀) 当館蔵
- 2.《藍三彩兎形腕枕》中国・唐時代(8世紀) 当館蔵
- 3.《緑釉犬》中国・後漢時代(1-3世紀) 当館蔵
- 4.《埴輪 犬》日本・古墳時代後期 出光美術館蔵
- 5.八木一夫(牛) 日本・1973年 兵庫陶芸美術館蔵
- 6.《灰陶加彩駱駝》中国・北魏時代(6世紀) 当館蔵
- 7.鈴木 治(天馬横轉) 日本・1973年 岐阜県現代陶芸美術館蔵

山口県立萩美術館・浦上記念館
HAGI URAGAMI MUSEUM

〒758-0074 山口県萩市平安古町586-1 TEL 0838-24-2400
URL <https://www.hum.pref.yamaguchi.lg.jp/>

Animals in Ceramic Art Exhibition

三輪 龍氣生展

— 行け、熱き陶の想いよ。

令和2年(2020)

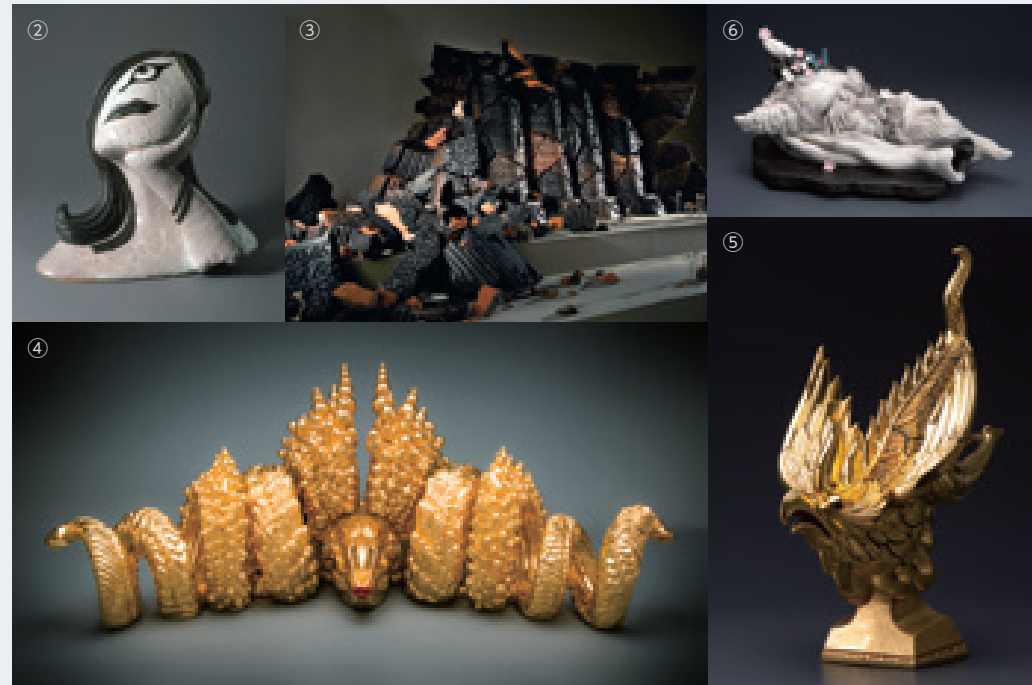
9月12日(土) ~ 12月20日(日)

休館日 / 月曜日
(祝日の場合は翌平日。ただし、毎月第1月曜日と9月14日(月)は開館します)
開館時間 / 9:00~17:00(入場は16:30まで)
観覧料 / 一般:1,200(1,000)円、70歳以上・学生:1,000(800)円
(普通展示の浮世絵展示と東洋陶磁展示もご覧いただけます)

※()は前売りおよび20名以上の団体料金。
※18歳以下の方と高等学校・中等教育学校・特別支援学校の生徒は無料。
※身体障害者手帳、療育手帳、戦傷病者手帳、精神障害者保健福祉手帳の提示者とその介護者(1名)は無料。

地域の伝統的な文化芸術として存続しながらも産地陶芸という既成概念から脱却し、同時代的芸術表現としてこれからの日本陶芸を望みさせる作り手はそれほど多くはいません。本年80歳を迎える三輪龍氣生(昭和15年(1940)生まれ、龍作、十二代休雪)は、個性の現実(リアル)とは作り手が思考したかたちそのものとして表現されることを自明として制作実践を重ねてきた表現者であり、陶芸の造形の未来を予想させる先駆的作家の一人です。

本展覧会は、昭和41年(1966)に初作した、ハイヒールをかたどった白萩のシリーズを「花子の優雅な生活」と名づけて発表しはじめてから、平成22年(2010)の黒陶彩のシリーズ「龍人伝説」や今回の最新作に至るまでの半世紀以上にわたり、「エロス(愛)」と「タナトス(死)」を主題に、人間存在の意味を陶による造形表現で問い掛け続けてきたこの作家の陶表現を、新作と未発表作も含めた代表作約110点で紹介いたします。



◆イベントのご案内(実施詳細は後日HPでお知らせします)

アーティスト・トーク(定員20名。要事前予約・要観覧券)

三輪龍氣生氏に自作を語っていただきます。
日時 ◆9月19日(土)・10月17日(土)・11月21日(土)・12月19日(土) 14:00~15:30
場所 ◆展示会場(当日「④受付・チケット購入」カウンターで会場をご案内します)

ギャラリー・ツアー(定員20名。要事前予約・要観覧券)

日時 ◆毎月第2・4日曜日、11:00~12:00
場所 ◆展示会場(当日「④受付・チケット購入」カウンターで会場をご案内します)

- ①《LOVE》昭和44年(1969) 滋賀県立陶芸の森蔵 撮影:杉本賢正
- ②《淑女と紳士》昭和51年(1976) 当館蔵 撮影:田中中学
- ③《純・卑劣呼の書No.8》平成4年(1992) 当館蔵 写真協力:阿部出版(芸芸)
- ④《女帝・荘厳》平成27年(2015) 菊池寛実記念 智美術館蔵 撮影:伊藤ゆうじ
- ⑤《行け、我が想いよ、黄金の翼に乗って》平成30年(2018) 個人蔵 撮影:伊藤賢
- ⑥《白屋夢(龍人伝説)》令和元年(2019) 個人蔵 撮影:伊藤賢

沖潤子 2020年4月4日(土) - 2021年3月28日(日)
anthology



沖潤子 anthology に寄せて

展示会の開幕が近づくに連れて、関係者間のやりとりが頻繁になっていく。展示会タイトルや作業スケジュールなどの諸々が決まり、当館の方ではどういった準備が必要かといったことも段々はっきりしてくる。こうしたやりとりはメールですることが多いけれど、メールとはいえ、作家の集中力や熱量は文字から十分に伝わってくる。その波に乗ってこちらの気持ちも高められてゆく。

現在、鎌倉市を拠点に活動する沖潤子は、自身の母親が残した布に針と糸で自己流の刺繍をはじめたことから、アーティストとしての道のりが始まった。以後、私たちが抱く刺繍のイメージを覆すような作品をいくつも発表してきた。

この作家が作品制作のために使う布は、もとは誰かが服やカバンとして使っていたり、保管して古くなったりしたポロだという。持ち主と一緒に思い出をたくさん吸ってきたものだ。作家が進める針に従って、糸はこのポロを継ぎ接ぎ、再構成しながら、刺繍を展開する。刺繍と言っても、布の表面を整然と装飾するのではない。下絵を描かず、作家のインスピレーションに従ってなされる刺繍は、ある時は布を侵食し、またある時は、平らであるはずの布を糸のテンションによって立体化してゆく。作家の手を介して布と糸がさまざまなバランスで交流し、そうして出来上がった作品には、新しい生命が吹き込まれる。

完成間近の作品写真を送っていただいたのは3月。パソコンの画面で見ると暗闇から刺繍が浮かび上がってくるような印象だった。そう、このたびのインスタレーションは糸が存在感を発揮しているのだ。

展示会の開催に先立って2019年10月中旬から2020年2月末の期間、沖が発信源となり、SNS、ホームページやチラシで本展に使用する糸巻きの提供を募った。その想いは、展示会リーフレット*の中で作家自身の言葉によってつづられているが、萩という場所で展示会を行うということと、自身をつなぐものを求めて企画された。最終的に全国の方々から7000個あまりの糸巻きをご提供いただき、当館へ持参してくださった方もいる。集まったものは、色、かたち、経年変化の具合が実にさまざま。これまでずっと作家の

3点のうち、最初に着手されたのがこの作品。いつも刺繍を始めるときは、グルグル渦巻きのように縫うことから始まり、そこからさまざまに表現を展開していくそうだ。

創作活動を応援して来られた方、偶然知って要らなくなった糸巻きを譲ってくださった方、さまざまな立場の方々からご協力いただいたことが分かる。

茶室空間では、このたくさんの個性を持った糸巻きが、四畳半をびっしりと埋め尽くす。色とりどりに、賑やかでありながらも混乱を極めている。その上には、大きな作品群が静かに佇み、糸巻きのカオスが糸の造形へと昇華されていく。刺繍の一針一針には、それぞれの糸巻きに関わった人たちの記憶と、作家の想いが込められる。

作品群は、白い糸でグルグル渦巻きを描いた作品、目が覚めるような黄色い糸が束ごと刺繍された2作品の3点からなる。小さな針目は増殖し、夥しい数となって見る者を圧倒する。針を手にしたことがある人なら、誰もがこの作家の驚異的な集中力を直感するだろう。よく見ると一つ一つの針目は不規則で歪なところがあり、それが、手仕事の気配として残っている。茶室空間を前にして、大きく感情が揺さぶられる。

ちょうど本展が開幕した頃から、新型コロナウイルスの影響によって経済状況や私たちの生活は大きく変わった。この数ヶ月で、社会全体が大きな組織、権力に付随する縦の関係に危うさを覚えるようになった。その反動か、個が発信し、共鳴する人たちと繋がろうとする動きは、今まで以上に大きくなって加速している。

そんな状況の中、沖が続けてきた創作への姿勢が、今の時代性と大きく重なるように感じているのは私だけではないだろう。沖が他の誰かではない強い個性で表現し、その世界観に共鳴した人たちから寄せられた素材によって、また新しい作品が生まれる。人とのつながり、ポロや糸が経てきた時間を糧に、これからもこの作家は、私たちの既存概念や価値観を思いもよらぬ表現で飛び越えていくに違いない。

※当館ホームページにて「沖潤子 anthology」リーフレットPDFデータの閲覧・ダウンロードが可能。

(淵田恵子／当館専門学芸員)



このはっきりとした黄色は、沖自身がウコンで染めて出来上がった色だとうかがった。

普通展示 | 浮世絵 展示室 1

山口県と浮世絵

会期 | 令和2年(2020)7月28日(火)～8月30日(日)



葛飾北斎「諸国名橋奇覧 すほうの国きんたいはいし」横大判錦絵、天保(1830～1844)初期

浮世絵には山口県に関連した作品が少なからずあります。錦帯橋をはじめとした名所風景、壇ノ浦での源平合戦、大内義隆、毛利元就といった歴史上の出来事や人物、萩藩お抱えの力士などは、浮世絵の題材として繰返し描かれてきました。また、明治維新の頃には、木戸孝允、伊藤博文、山県有朋などの元勳たちが描かれるようになります。

今回の展示では、これらの作品をジャンルに分けてご紹介します。

普通展示 | 浮世絵 展示室 1

街道絵の世界

会期 | 令和2年(2020)10月13日(火)～11月15日(日)



歌川広重「東海道五十三次之内 日本橋 朝之景」横大判錦絵 天保4～5年(1833～1834)

江戸幕府は日本橋を起点とする幹線を整備し、東海道、木曾街道(中山道)、奥州道、日光道、甲州道を五街道と定め、あわせて脇街道も設けました。

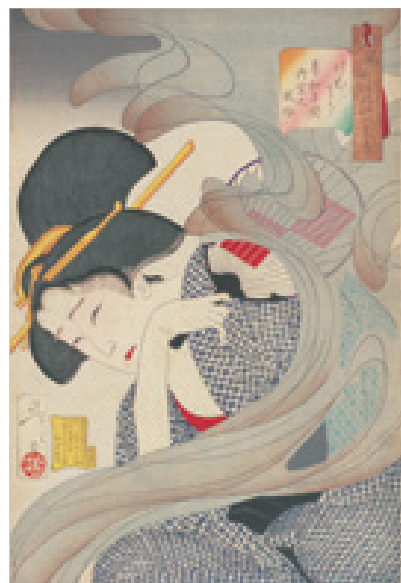
諸大名の参勤交代によって、街道の機能が発達し、一般市民の往来も活発になります。

天保期には、お伊勢参りに代表される有名な寺社参詣や名所旧跡巡りなどを目的にする旅行が大流行し、浮世絵に街道や宿駅を題材にした風景画が描かれるようになりました。

普通展示 | 浮世絵 展示室 1

月岡芳年 風俗三十二相

会期 | 令和2年(2020)9月12日(土)～10月11日(日)



月岡芳年「風俗三十二相 けむさう 享和年間内室之風俗」大判錦絵、明治21年(1888)

月岡芳年(1839～1892)は、明治時代にもっとも活躍した浮世絵師のひとりです。「風俗三十二相」は明治21年(1888)に刊行された32枚のシリーズで、芳年が描いた美人画の代表作として知られています。

「三十二相」とは仏が備えている32の優れた身体的特徴をいいますが、この作品では当時流行していた江戸懐古の風潮を反映し、寛政期から明治までの各時代の風俗で、さまざまな階層の女性たちの様子を描き分けています。

普通展示 | 東洋陶磁 展示室 2

茶碗の造形美

会期 | 令和2年(2020)9月12日(土)～12月20日(日)



萩焼 文筆洗形割高台茶碗 17世紀

茶碗は茶の湯において最も基本で、かつもっとも重要な器です。喫茶の習慣が9世紀頃に中国から日本へもたらされて以降、茶碗は常に喫茶の文化と共にありました。

茶碗の価値観は時代や世相を反映して変化してきましたが、千利休(1522～1591)が大成した侘茶の流行によって、現地では雑器であった朝鮮産の茶碗がもてはやされました。茶碗は現地から買い取るのみではなく、現地に窯を築いて作せたり、現地の陶工を日本に連れ帰って作陶に従事させるなどして需要に対応しました。

本県に縁の深い萩焼もそうした流行の中で、朝鮮より連れ帰られた李勺光・李敬の兄弟らによって17世紀初期に始められました。当初は、元となった朝鮮の茶碗を指向していましたが、江戸時代を通じて様々な要素を取り入れ、現在に至っています。

本展では、茶の湯に欠かせない茶碗の中から、萩焼と、朝鮮の茶碗を中心に紹介します。